

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter
(第2期第8号—通巻第20号—)

Working Paper Series 2-8-5
2012年9月

第II部 特集：馬場先生の追悼研究集会の報告論文

過剰富裕化論の学説史的考察

——形成、展開、意義——

戸塚茂雄

(青森大学 totsuka@aomori-u.ac.jp)

http://www.unotheory.org/news_II_8

「宇野理論を現代にどう活かすか」Newsletter

事務局：東京都練馬区豊玉上 1-26-1 武蔵大学 横川信治

電話：03-5984-3764 Fax：03-3991-1198

E-mail:contact@unotheory.org

ホームページ <http://www.unotheory.org>

過剰富裕化論の学説史的考察

——形成、展開、意義——

戸塚茂雄

序

I 形成

II 展開

III 晩年の展開—到達点

IV 意義

結びに代えて

序

馬場宏二氏は、独創的な業績を経済学方法論、経済学原理論、段階論、現状分析、経済学史、文明論、現代社会批評、哲学等多分野にわたって多く残されているが、その中で特に過剰富裕化論は極めてユニークな理論とあってよい。その理論内容においてもまたその経済学界における冷遇においても。

本稿では、馬場氏自体の過剰富裕化論の形成、展開過程を学説史的に追う作業を試みる。さらにこの学説の意義と問題点を明らかにしたい。馬場氏自体の過剰富裕化論の形成・展開過程を追うと同時に、経済学説史における位置をも追うことになる。

I 形成

過剰富裕化論がいつ形成されたか？1976～77年の在米体験、1978～79年の訪中で、アメリカの過剰富裕化の現実と「敗戦直後の日本並みの中国」(馬場「過剰富裕化論と現代」青森大学『研究紀要』第31巻第3号、2009年、16ページ)でも人間は生きていけるといふ両極端な現実の対比的考察と万年窮乏化論への反発、そして先行諸説(殆どないが)の学習。これらのもとで氏は過剰富裕化論を着想した。これについては、氏自身のインタビュー記録(土田とも子編『全所共同研究の40年 I』東京大学社会科学研究所、2011年、241～242ページ)や、近藤邦康氏のそれ(同上書、80ページ)から裏付けられる。また馬場氏の「会社主義着想のわずか後に過剰富裕化を着想」(馬場『宇野理論とアメリカ資

本主義』お茶の水書房、2011年、422ページ)したという文言や私宛の信書(2006年7月5日づけ)からも裏付けられるから、これらの体験と1972年に刊行されたローマクラブの『成長の限界』(ダイヤモンド社、大来佐武郎監訳)等の環境問題関係の読書(ただし馬場氏の『成長の限界』の読書は「ずっと前に出ているのを、後になって読んだような気がします」という言葉が先の信書に記されているから、直接的な影響はないとみてよい)によって形成されたと思う。また氏の「後の過剰富裕化論というのは、実はそのとき(社研で戸原さんがやっておられた世界経済研究会のころ—引用者)に考えはじめた議論です」(馬場宏二他「社会科学を語る」東京大学社会科学研究所『社会科学研究』第45巻第4号、1994年1月、273ページ)という証言もある。この世界経済研究会は、柴垣和夫氏によると(私の問い合わせに対する2012年5月5日のメール返信。その後『社会科学研究所の30年』のインターネット版を見て確認)1962年から1967年にかけて東京大学社会科学研究所で行われ、馬場氏もそのメンバーであったとのこと。とすると着想は、1960年代ということになり、きわめて早期に着想されていたことになる(「私が過剰富裕化論を最初に言ったのは多分1980年ごろ、口ではもっと前から言っていたのですけど」[前掲「過剰富裕化論と現代」14ページ]という発言もある)。ただ活字の上での過剰富裕化論の初出は、ずっと後で(1985年)、『富裕化と金融資本』の書き下ろしの「序論 富裕化の哲学」である。そして勿論その前提として氏のアメリカ経済研究が与って力があつたと思われる。その一例として氏の処女作『アメリカ農業問題の発生』(東京大学出版会、1969年)における「全体として摂取量が減少するなかでの穀物・肉から酪農品・蔬菜果実への重心の移動をみせた食習慣の変貌、全体として繊維品使用の停滞するなかでの綿製品の絹・人絹による代替、が右のような結果を生んでいたのである。ところで、かような変容がなぜ生じたかについての穿鑿は、ある意味で我々の守備範囲を超えた作業である。男が肥りすぎを嫌い、女が絹物をほしがるとを説明することは、経済学の課題ではないであろうから。だがしかし、それがこの年代の生産力の特殊な展開と所得水準の上昇にかかわる現象だったことを見逃すわけにはいかない。生産工程の機械化・電化は肉体労働量を減じ、社会構成上もホワイトカラー層を増し、さらに自動車の普及による交通通勤労働の軽減と相まって、熱摂取量を減じつつビタミン等への要求を強める。自動車の普及、家庭電化、中央暖房装置の一般化は薄着の習慣を作り出す、といった次第である」(同上書、230～231ページ)という理解が氏のその後の体験と合わさって、富裕化論・過剰富裕化論を形成していったのではなからうか?1920年代アメリカ農業の分析は、まさにのちの富裕化論、過剰富裕化論の形成に至る経済的実態の一部を明らかにしているのであるから。またこれが他の国の分析であったなら、このような展開にはならなかったであろうから。当時の世界で、富裕化・過剰富裕化を実現し始めた国はアメリカをおいてほかにないからである。

以上で着想は判明したが、それでは富裕化論・過剰富裕化論の原型はどこに求められる

か？

それは 1979 年の「アメリカ型経済文明の衰退」（初出『エコノミスト』1979 年 11 月 15 日号、馬場『現代資本主義の透視』東京大学出版会、1981 年に所収）である。この論文で馬場氏は、「かねてからの疑問だが、今日までの資本主義下の生産力の発展は、人類史的にいて唯一不可避の道だったのだろうか。もっと端的に言えば、生産力の発展は、第一次世界大戦前後にアメリカで自動車が大衆化しはじめたあたりから、道をまちがえたのではなからうか。そしてその帰結が、今日の資源・環境問題の深刻化なのではなからうか」（『透視』169 ページ）と富裕化論につながる問題意識を披歴している。そして「この疑問が奇異にひびくだろうことは想像に難くない」（169 ページ）と当時の学界の常識を批判したうえで、「第一次大戦を境としてアメリカ型の生産力構造が世界に支配的になったところが今日の問題の源だなどという理解は、容易に現れそうにない」（170 ページ）と述べている。これはのちの富裕化論・過剰富裕化論の荒削りであるが、問題意識の原型とみてよい。そしてこの論文で、氏はアメリカについて「豊かな社会」、「稀少性の消滅」、「ムダの制度化」という指摘をし、「いわゆるアメリカ的生活様式—欲望自体も資本に開発される個別的社会的領域での生活水準上昇—は、全体としておそろしく資源浪費・環境破壊・肉体労働節約的なのである。ダイエットとジョギングの流行は、その皮肉な成果であろう」（179 ページ）とすでに後年頻出する「ダイエットとジョギングの流行」という常套句を出している。さらに氏は「全社会的には、さしあたり、経済成長による個別的生活水準上昇と汚染の増加を選ぶか、環境保全投資によって従来の経済成長を抑制してでも汚染による生活水準低下を防ぐかのトレード・オフの問題である」（183 ページ）と現状を鋭く見抜いている。またいわゆる社会主義との体制問題と関連して、「現代資本主義は、大衆的生活水準の維持向上を武器に体制的統合に成功してきた。それを支えたのが、生産力の発展であった。だがそれが永続する見込みがなくなった」（186 ページ）が、それに代わる体制もない。「とすれば、現代資本主義にとって—その「成功」のゆえに成功の基盤を失った現代資本主義にとって—もっともありうべきは緩慢な自己解体である」（186 ページ）と断じている。

大衆的富裕化という概念の初出は、『透視』の第 1 章「現代資本主義序説」という大きな章にある。これは 1975 年から 1980 年にかけて刊行・発表された論文を下敷きに書き下ろしたもので、いつの文章か特定は難しいがその中で、「現代資本主義はその安定成長のうちに社会関係の過剰解体を伴う大衆的富裕化を実現していた。富裕化はひとまず社会的統合の手段として機能していたが、その極、社会的解体の原因となるものに他ならなかった。それは人々に生活の目的を喪失させ、関心を非社会的にする。他方、欲望は私的レベルで解放され、より大なる多様な物的欲望を引き起こすが、この欲望は他者としての社会関係にも向けられそこへ合理的であろうと非合理的であろうとさまざまな要求をつきつけることにもなる」（76 ページ）、「因果関係には多くの経路があるが、現代資本主義的富裕化

のもとでは、もともと統合力に限界がある物的供与自体も次第に実現し難くなってゆく。いいかえれば、富裕化が欲望解放社会をもたらすことによってそのまま社会的解体に導くとともに、欲望解放が物的生産や社会的秩序の維持を制約して窮乏化をもたらすことにもなるのである」(78 ページ)などと述べているが、これが初出である。この文章について後年馬場氏は、「現代資本主義論のキーワードは大衆的富裕化である。昨年(1981年—引用者)上梓した『現代資本主義の透視』のなかで、この命題をおそろおそろ持ち出してみた。いささか挑発的にひびくことが心配だったからである。ところが意外に反応がなかった」(馬場宏二『富裕化と金融資本』ミネルヴァ書房、1986年、66 ページ。この文の初出は、『経済評論』1982年11月号)と述べているが、これが氏の当時の意識であり、当時から現在に至る経済学界の富裕化・過剰富裕化論に対する反応である。この後一貫して馬場氏は、孤立無援といった状況の中で議論を展開していった。予想外に富裕化・過剰富裕化論は、古くから主張されており、氏の学問人生の中盤からその終焉まで長期間思索し、深化させていったテーマであったと言ってよい。また氏の東京大学での最終講義が過剰富裕化論であったことからそのように言える(馬場宏二、戸塚茂雄「社会科学を語る(続)」青森大学『研究紀要』第33巻第1号、2010年7月、24 ページ)。なおこの文章には「現代資本主義的富裕化」(78 ページ)というその後見られない規定もあるが、詳述されていない。次にこのような過程で形成された富裕化・過剰富裕化論は、どのように以後展開されたかを見よう。

II 展開

『現代資本主義の透視』を承けて馬場氏は、タイトルにそのものずばりの富裕化を掲げた『富裕化と金融資本』(ミネルヴァ書房、1986年)を刊行した。これ以降が富裕化・過剰富裕化論の全面展開である。その「はしがき」で氏は、本書が「現代と宇野理論体系との対話」(i ページ)であってその過程において「人びとの生活や意識や行動様式を、要するに社会や時代を規定する最大の要因は、つまるところ生産力ではないか。この認識は(中略)わたくしにとっては、わずかな個人的見聞の所産でもあり、それ以上に、諸論稿を書くなかで次第にはっきりしてきた発見でもあって、それが富裕化論になった」(i ~ ii ページ)と富裕化論が生まれる過程を述べている。この「対話」は大内国家独占資本主義論からの離脱の確実な一歩とみてよい。この論文集の中で唯一の書き下ろしが「序論 富裕化の哲学」である。富裕化論が本格的に定式化されたのである。この論文の冒頭に「現代世界を規定する最大の動因は富裕化なのではなかろうか。おおかたの予想をこえる生産力の発展、それに支えられた、物的消費の空前の膨張、そしてそれに誘われた、富裕化願望のうちつづく昂進。これら一連の事態が、時代を突き動かす主因となっているように思われる。米ソ軍事対立をひとまず措けば、この富裕化に比肩するほどの影響力を持つ歴史規定

要因は見当たりそうにない」(1 ページ) と富裕化の事実とそれが歴史規定要因であるとまで洞察している。そして「富裕化はそれ自身大衆的な過程である。生産技術の開発が資本の利潤追求によって、歪曲されそれが広告等様々な手段で強制されてきたことは否定しえないが、そうした歪曲を含む発達が、結局は大衆の願望自体をも形成し続けてきた。しかもそれは国際的にも強力な伝播効果をもち、人びとの生活実体ばかりか、各種のイデオロギーの内容や相互の力関係、さらにそれにもとづく社会体制をも変えるものとなった。そして、人類全体に共通する課題をしだいに明示しつつある」(1 ページ) と富裕化が大衆的な富裕化であり、人類に共通する課題であるとしている。この前書きに続いて、「富裕化社会の到来」、「富裕化社会の普及」、「富裕化世界の構造」を順次明らかにしている。

「富裕化社会の到来」では、「戦後史は富裕化を特徴としたが、富裕化の歴史の中では戦後が頂点に位置するのである」(2 ページ) とし、資本主義以前から資本主義の発展に至る過程を跡付け、「資本主義は生産力の累積的發展をもたらす機構を持つ社会であった」(2 ページ) と資本主義の本性自体に富裕化をもたらす動因があったとみている。そして「昨今に見る大衆的富裕社会の広汎な出現は、資本主義の歴史の中でもかなり晩期に属する」(3 ページ) と「過剰富裕化社会の到来」の時期を示している。具体的には第 1 次大戦後のアメリカが「大衆的富裕社会の起点ととらえることができる」(6 ページ) とする。

「富裕化社会の普及」では、1920 年代から 1970 年代までの世界経済史をさらったうえで、1920 年代のアメリカに端を発した富裕化社会が、第 2 次大戦後 1960 年代西ヨーロッパに、1970 年代日本に普及し、そしてそれが「西欧や日本にとって社会建設の目標となった」(10 ページ) と分析している。なお馬場氏は、その際ナチについて「富裕化社会化がむしろアメリカ以外の地で進みつつあったわけである」(9 ページ) としているが、疑問の余地がある考えである。

「富裕化社会の構造」では富裕化社会から過剰富裕社会へと展開している様を明らかにしている。「これら西側先進工業国は、富裕化社会であるだけではない。むしろ過剰富裕社会だといっている。これは別に道義的判断から言うのではない。2,3 の客観的証拠にてらして、過剰富裕だと認定できるのである」(12 ページ) と、「ダイエットとジョギングの流行」、「モデルチェンジによる乗用車の押し込み販売」等をあげ、このような過剰富裕状態が「安易に地上に広がったさいには、人類の存続が不可能になる」(23 ページ) と。そして「現在の地上の人口がそのまま『西』側なみの生活水準を実現したとすれば、地上の経済規模は 4 倍になる。つまり、石油消費も森林破壊も環境汚染も 4 倍になる。しかもこうした単純な事態は起こり得ない。生活水準の平等化が進むとしてもそれは拡大均衡としてしか起こりそうにないから、人口はさらに増え、目標とされる『西』側の生産力や生活水準はさらに上がる。のみならず、(中略) 急速な工業化の進む時代には資源浪費や環境破壊や事故が放任される。急速な富裕化が人間関係を変形し破壊的な行動様式を多々もたらす

ことを措くとしても、人類は今後こうした危機につぎつぎと対処して行かなければならない」(23 ページ)とこれ以降頻繁に出される命題を掲げ、結論としている。馬場氏は「先進工業国は全体として貧しさの海に浮かぶ富裕な諸島として現われ、その高い消費水準と、それを支える高い生産力の演示効果」(16 ページ、傍点引用者)を世界に強烈にまき散らし、世界全体がその生活水準を目標とするようになり、実現されれば、人類の生存に適した地球環境はなくなるというのである。また本書で、「1人当たり国内総生産1万ドルは過剰富裕である」(15 ページ)と規定し、それから脱却するには「経済成長鈍化の定着を通じて大衆の神経症的富裕化願望を鎮静させることである」(15 ページ)と喝破している。「大衆の神経症的富裕化願望」は言い得て妙である。素晴らしい洞察である。

この「富裕化の哲学」は1985年8月に書き下ろされたもので、初めて富裕化論が富裕化の哲学として明るみに出たのであって、学説としての大きな前進が見られたと言えよう。

なお本書では「過剰富裕化論のすすめ」という小文が収録されているが、そこで「富裕化がなぜ起こったのか。そして何をもたらしたのか。それを見きわめることが、今日、経済学にとって最大の課題なのではなかろうか」(67 ページ)と従来の経済学では解けない問題が現れたのだから、氏ののちの言葉でいうと視角転換の経済学を構築すべきであるということになる。この小文の初出は、1982年であるから大変早い時期である。その15年後に視角転換の経済学を副題とした『新資本主義論』が刊行されるのであるから。

翌1987年に刊行された『シリーズ世界経済Ⅱアメリカ—基軸国の盛衰—』(お茶の水書房、第6章生活水準と福祉政策、298 ページ)で1人当たりGDPの国際比較をし、過剰富裕化に達した年代の特定をしているが、これ以降頻出する常套句の初出である。

1997年に刊行された『新資本主義論—視角転換の経済学—』(名古屋大学出版会)は、氏の唯一の書き下ろしの本で、全面的に過剰富裕化を展開した力作であり、問題作である。本書の「はしがき」で、氏は「これは、大衆的過剰富裕に焦点を合わせた、経済学の新しい体系である。大衆的過剰富裕は現代資本主義に特有の現象であり、資本主義の歴史の中に伏在しながら近年急速に表面化したものである。それは今や非資本主義圏をも道連れに、人類文明全体を存亡の危機に引き込もうとしている。ところが経済学は、これに対して驚くべく鈍感であった。経済学には諸潮流があるが、過剰富裕を問題として正面に据えた説は見当たらない。(中略)この惨状を脱するには、(中略)宇野理論体系の活性化によって果たすほかない」(i ページ)と明確な新経済学体系構築宣言をしている。300年にわたる経済学の歴史上初めての「成長を問題視する学である」(2 ページ)と言ってよい。それでは今までの経済学は氏によればどのようなものであったか?経済学の歴史を振り返ったうえで、「成長が万能薬となれば、成長しないことが最大の悪になり、経済学はひたすら成長の障害を除去し成長の促進を図る手段を発見するための学問になる。それはいずれにしろさほど有効なものではないのだが、結論を先取りして言えば、経済学は社会を過剰富裕状

態に押しやり、人類滅亡を加速し不可避にする犯行に加担することになる。(中略) 視角転換を図るのは、まず、経済学がこうした人類史的犯罪の共犯者になるのを防ぐためでもあるが、それだけではない。成長しないことを問題視するのをやめて成長することを問題視する視角は、これまでの経済学にあった盲点に改めて光を当て、全く新しい資本主義像を示す手がかりとなるであろうし、ヨリ細かい論点でも、説き方を改める手がかりを多々提供するはずなのである。もっとも、ここで逆転しようとするのは、直接には経済政策思想あるいは経済学の底に潜む社会哲学である」(3~4 ページ) と問題意識を明らかにしている。これが視角転換の意味である。このような視角をとる「経済学は嘗てなかったものとする」(5 ページ) と氏は自負しているが、確かにペティ以来の経済学にこのような学説はなかったと思う。従来の経済学は人類滅亡に加担している「共犯者」であると穏やかでない主張であるが、ここに馬場氏の批判意識が如実に現れていると言える。本書は全編問題提起的発言のオンパレードと言ってよいが、過剰富裕化に関するところで、新しい展開だけを見る。資本主義の歴史的な位置づけでは、「資本主義は経済優先社会である。そのことを端的に示すのは、この体制が、歴史的に見ればほんのひとつまみの期間しか続いていないにも拘わらず、その短い期間に驚くべき経済拡大を遂げて、地球の限界に達してしまった事実」(17 ページ) であり、「例外的成長体制」であったことを歴史的に跡付けている。また馬場氏は、「経済が目的となった社会」という表現で、「文化的には虚無の社会で、公認された私利追求が、いわば唯一の道徳的価値になる。私利追求の機構は資本であるが、その本性である自己増殖が、社会の主たる目的になる。社会の多方面から湧き出る文化的社会的要求は、これに従属するか破壊される。スミスの『社会の利益』は突き詰めれば資本蓄積に他ならない。それはもともと手段であったが、転倒して目的となった。このように倒錯した社会が資本主義社会なのである」(47 ページ) と資本主義社会の成長至上主義を明らかにしている。「世界的経済成長」を主題にした章で、氏は「豊かさの演示効果は、さらに後、情報閉鎖していた『東』や、情報流通が不完全だった『南』にも及んだ。(中略) マスコミ・通信技術の発達と飛行機・自動車の高速交通が、情報流通障害を越えて、豊かな社会、実は過剰富裕社会の演示効果をまき散らしたのである」(245 ページ、傍点引用者)) と「特殊アメリカ的世界の転移」を明らかにしている。国権的社会主義が崩壊する以前の時代の分析であるが、過剰富裕社会のモデルであるアメリカ的世界の世界大での波及過程を明らかにしているのである。この文言で、ガルブレイスなどの「豊かな社会」は、馬場氏から見ると「過剰富裕社会」であることを示している。

本書の最後に「結論 過剰富裕時代の到来」があるが、そこでの新論点を見る。現代社会の危機の本質について、氏は「資本主義的暴走の挙げ句、自らの生物的生命維持にさえ危険な状況を招いてしまった、自滅の危機なのである。そのことを忘れて、軽々しく地球環境の危機などと呼ぶと、危機は客体化され、単純な技術的解決があり得るとする錯覚を

引き起こす源になる。人類という生物の生命維持志向と、人類が自ら生み出した資本主義が持つ社会破壊性との矛盾、これが危機の本質なのである」(337 ページ) という主張は、人類自滅の危機というものを前面に押し出し、現在人口に膾炙している「地球環境の危機」といった惹句が本質的なものでないことを示している。本質的でないどころか、人心を惑わすものという批判である。次いで馬場氏は、このような「根源的危機を把握するには、単純明晰な、原子論的要素還元型の思考に頼ることは出来ない。これだと、汚染の原因をつぎつぎと突き止め、汚染を解消する技術をつぎつぎと開発してゆけば救われることになる。ところが、まさに新技術をつぎつぎと開発してきた思わざる帰結が地球の環境復元力の破壊に他ならなかった。要素還元主義は、資本主義の下では主流となる思考方法である。商品売買にしろ工業生産にしろ、起点と終点が明確に存在し、その間は直線的につながっている。起点以前や終点以後の、見えざる社会的連関や自然循環を考える必要はない。この思考様式自体が、環境破壊と脱社会化の根因なのであった」(337~338 ページ) と要素還元主義批判を展開している。これは新しい議論である。この議論を踏まえて、氏はカーソンの『沈黙の春』やローマクラブの『成長の限界』を引き合いに出し、要素還元主義に代わる全体論的思考を展開している。とりわけ『成長の限界』が、「根本的に優れているのは、人口と経済規模の幾何級数的増加が続けば、いかなる選択によっても、人口と生活水準の急落に直面せざるを得ないとする全体論的思考である。一見マルサス主義の一種であるが、マルサスと違って技術的進歩は織り込まれており、代わりに環境汚染が重視されている。これに『過剰富裕』の概念を加えられていれば、殆ど完璧であろう」(338~339 ページ) とローマクラブの報告の革新性を絶賛している。そして本書の最後の節「C 無事に生きて行くために」で、氏は「残された時間はそう多くはない。前述した、慈悲深い神が一瞬にして人類平等を実現してくれたらという仮定では、世界経済規模が 5 倍になるのだったが、世界経済がこのまま年 2.5% で成長を続ければ、人類平等が達成されないまま、来世紀 (21 世紀—引用者) 後半に入ったあたりで規模は 5 倍になる。技術的条件が変わるから、そこで直ぐ破滅には至らないかも知れないが、全体論的に考えれば、人類がこのまま来世紀末 (21 世紀末—引用者) という時代を迎えられる保証はあまりない」(341 ページ) と従来の思考実験を踏まえて人類の近未来予測をしている。この危機からの脱出策は、「脱社会化を含む過剰富裕状態を解消すればよいのである。人口抑制も必要だろうが、こちらは途上国側の課題である。先進資本主義国側としては、社会的摩擦を極小化しながら生活水準を引き上げるにはどうしたら良いか、これを何としてでも考え出さねばならない。これまでの環境論に共通する欠陥は、この生活水準切り下げ、経済成長の逆転を課題として取り出せなかったことである」(342 ページ) と脱出策の基本を示し、環境論の欠点を指摘している。それでは馬場氏は、生活水準をどこまで下げれば、人類は生き延びられるとしているのであろうか? その前提として、「軍拡・戦争・兵器実験の類はもはや許されな

い贅沢である」(342 ページ) からやってはならないし、また「情報化やサービス経済化が進めば成長しても自然に対する負荷は増えないだろうという議論」(342 ページ) をとってはならない。そのうえで「どこまで生活水準を下げるか、目標を考える。差し当たり、(中略) 1 人当たり 5000 (1982 年) ドルで良い。(中略) 分配さえ適切ならとうてい餓死は出ない」(342 ページ) と。それでは「いかにして下げるか。メカニズムを考案するのもかなり難しいが、社会的合意や政治的決定を導くのは絶望的と言えるほどに難しい」(343 ページ) とその困難性を述べている。そして「縮小のメカニズムに現実性を付けようとすると、それだけで脱資本主義化が必要になって来る。社会的政治的合意を形成するのはさらに困難で、殆ど著者の想像力の範囲を越える。もともと、成長が社会的慣性になった、脱社会化が進行する、過剰富裕資本主義が相手である。成長万能主義から脱却させるだけでも容易ではない。しかも成長主義の背後に自由と民主主義の神話がある。(中略) 神ならぬ人間の絶対的自由をいささかは封じなければ、人類の存続を可能にする社会は構想できない。(中略) 資本主義は、自由、欲望、自惚れ、強欲などの醜いものがぎっしり詰まったパンドラの箱を開けてしまった。それらを今更封じ込めようにも、奇蹟でも起こらぬことにはできそうにないし、そんな、草臥れるだけで褒められもしないことを敢えてする奇抜な人も、今のところ見当たらない。だが、ひょっとしたら箱の底に、まだ想像力が残っているかも知れない。人々の間には切れない繋がりがあり、人間は地球に活かしてもらっている生物に過ぎず、その恩恵は後に来る人達にも与えられることになっている、と感じ取れるようになる想像力が。もしそれが残っていて若い世代を捉えるだけの生命を保っていれば、人類の愚かしい自滅は避けられよう」(344 ページ) と極めて悲観的な結論を述べている。本書の結論で氏は、見られたように過剰富裕化をもたらした成長万能主義からの脱却には、近代以降人類が血と汗と涙によって獲得してきた所産である自由と民主主義、現在の先進国では自明の前提となっているそれを一部離脱しなければ、人類が立ち行かなくなっているという全く新しい境地に立つにいたった。そして人類自滅の危機を感じ取れる感性・想像力を持った若い世代に託すしかないという言で終わっている。これが馬場氏の視角転換の経済学の結論であるが、これ以降晩年の 4 部作が続く。そのうちの 3 つの著作が、過剰富裕論を展開しているので、新たな論点のみを見ることにする。後年本書について馬場氏は「経済学者が乗らない。経済を成長させるのがいいことだと思い込んでいるので、成長したらだめですよと言った私は、村八分になった。それでジャーナリズムでも広がりません」(馬場宏二「金儲けを慎む社会に」『浅草寺 仏教文化講座 平成 18 年度』浅草寺 2007 年、89 ページ)と回想している。それほど冷遇された主張であった。

Ⅲ 晩年の展開—到達点

『マルクス経済学の生き方 批判と好奇心』(お茶の水書房、2003 年) の「第Ⅳ編 過剰

富裕論の展開」は「世界観の逆転」と「自由化と過剰富裕化」で構成されている。

「世界観の逆転」では、「過剰富裕論に到達すると世界観が逆転する。思考の重要な枠組みのいくつかが逆転を余儀なくされ、その結果、総体としての世界観が逆転せざるを得なくなるのである。このことに、私自身なかなか思い至らなかったが、素直に整理すれば、結局ここに行き着くしかない」(346 ページ)と世界観の逆転の経緯が述べられている。そして「近代の根底を支えてきた生産力の発展が、自然環境の破壊と社会関係の磨滅と人間自体の生命力の衰退とをもたらし、結局は人類の自滅に導く過程に他ならなかったのではないかと疑いの目を向けられた時、近代的世界観が保持して来た自己確信は動揺せざるを得ない。経済成長や技術進歩といった、一見価値中立的な事態さえ自滅の過程だったかも知れないとなれば、自由解放、進歩発展、主体理性、人道人権といった、もはや疑い得ない絶対的価値として受容されてきた思想も、改めて存在理由を問われる」(346 ページ)と世界観の逆転せざるを得ない状況を明らかにしている。そして馬場氏は、「資本主義と社会主義」の世界史的展開を跡付けたうえで、「過剰富裕化の副作用である地球環境破壊が、公平な観察者にとっては無視しえない度合いにまで激化して来た。ひとびとの関心が地球環境破壊に集中すれば、その主犯であった資本主義体制が、ひいてはそれと共生してきた近代的世界観が、疑惑の眼を向けられることになる」(350～351 ページ)と「資本主義の世界観」へ眼を転じている。資本主義の本質的要素である、欲望の無限性の下に資本が自己増殖し、過剰富裕時代を招来したことを明らかにしたうえで、「ここまで来れば、欲望の暴走と資本蓄積は、過剰富裕が引き起こした地球環境の破壊と人間社会の崩壊によって暴力的に押し止められる以外には留まり得べくもない。人類社会の存続にとって過剰富裕状態が危険だとすれば、その主犯だった資本蓄積こそが糾弾されねばならないのだが、資本による自家麻酔のゆえに、糾弾の声は著しく弱々しい」(354 ページ)と資本の本性から逃れられない現代人批判をしている。資本による自家麻酔という新しい考えが出ている。次いで馬場氏は、現代の社会科学が、「近代市民社会論の末裔なのである。マルクスの説さえ例外ではない。(中略)社会科学が自立した認識体系であろうとすれば、この臍帯をひきずり続けるわけには行くまい。ここで必要なのは、最低限以下のような自問を試みることであろう。己を神に擬したがる自由の思想は社会破壊的である。神と自惚れた人びとが、倒錯した形でながら何とか折り合いを付け得るのは自由市場においてのみであるが、この自由市場経済は猛烈な自然破壊を伴う経済発展を引き起こした。そればかりか、自由の思想の影の社会さえ磨滅させた。それを何とか補填して来たのが、富裕化である。つまり、自由思想のもと、人間は自然破壊を伴う経済発展によってのみ、社会を維持してきたのではないか。この期に及んでなお、規制緩和とか民営化とかグローバリゼーションとかの名で自由を謳歌し、実はアメリカ化を促進するのは、人類自滅の道の暴走ではないのか」(359 ページ)と極めて独自の展開をしている。ここでは、マルクスを含む社会科学が、「近代市

民社会論の末裔」であって、自立した認識体系を持つにはそれから脱却しなければならないということ、それから派生する自由の思想が社会破壊的で、その破壊を免れさせたのが富裕化であるということ、これらが新しい論点である。前者は従来の社会科学への根底的な批判である。後者は自由の思想が社会破壊的であって、何とか社会を破壊せずに済んだのは富裕化という言わば飴のおかげであるという主張と思うが、事態を鋭くついていると思う。なお馬場氏は、「近代思想や合理主義に限界があるからと言って、ひとびとが盲目的なナショナリズムや排他的な宗教や迷信的な終末論のような、心情的妄想に依拠するようになれば、人類の滅亡はかえって確実に早まる」(362 ページ) と念を押すことを忘れていない。

「自由化と過剰富裕化」では、「グローバル資本主義の本質」を「地球全体のアメリカ化」(366 ページ) とおさえ、その「アメリカの特性」を「土地さえも当然のように売買する、資産商品化社会あるいは根源的商品化社会」(372 ページ) とし、さらに「市場至上主義」(378 ページ) であるとしている。この「アメリカによる同化作用すなわちグローバル資本主義は、世界的な貧富の格差を拡大しつつ、貧しい方から激しく社会と自然を荒廃させ、結局全体の滅亡を加速する。言い換えれば、グローバル資本主義化は、死の行進の加速、死への並足行進から駈足行進への切り替えに他ならない」(380 ページ) と過剰富裕化の進行が「死への駈足行進」であると喝破している点が新しい。そしてアメリカがすでに2世代を越えて「大衆的過剰富裕社会の体験を持つ。そればかりか、アメリカは自国の投機的大企業の利をはかるために、覇権国としての地位を利用しつつグローバル経済をはびこらせる元凶にもなった。地球環境保全について最も消極的で妨害的なのもアメリカである」(382 ページ) と現在のアメリカの環境問題への自己中心的な態度への批判をしている点も新しい。そして結論として馬場氏は、「人類にとって今必要なのは、先進諸国における、成長の抑制を越えた負の成長の政策化である。そのためには過剰富裕の認識が、不可欠の前提になる。その認識を阻んでいるものは、単なる個人の強欲ではなく、競争をこよなく尊いものとした、市場至上主義に他ならない」(384 ページ) とし、マイナス成長政策の提唱が結論である。それを阻んでいるのが市場至上主義であるというものである。この章の最後にオウエンの印象的な「現時点における人類の主要な苦悩は、もしこの表現が許されるなら、無知の過剰を伴う富の過剰から生じているのである」(384 ページ) という文言でしめられているが、ここに馬場氏の過剰富裕化論受容に対する屈折がある。

2005 年刊の『もう一つの経済学 批判と好奇心』(お茶の水書房) の「第 4 部」は「過剰富裕論の深化」と題され、4 章構成である。「資本主義の来し方行く末」では、資本主義の歴史を振り返ったうえで、資本の破壊性について、労働者、自然、消費者の 3 面を考えている。過剰富裕化については自然へのしわ寄せが「地球環境破壊である。当面最大の問題だが、実は資本主義発生以来、局部的な環境破壊は急進展していたのである。文明人は

地球が有限の球体であることは初めから知っていたはずだが、それを無限と仮定し、自然を意図的に『征服』し続けたばかりか、生産費切り下げのために破壊し続けた。破壊は後になるほど急速に表面化する。経済と違って自然や地球は成長しない。過去の破壊の累積によって、破壊可能な余地がすでにかなり減っていた。そこへ、加速された経済成長が、多様な新技術によって増幅された自然破壊力を伴って襲いかかる。そうなった地球で人類はあと何年生き続けられるか？」(302 ページ) という新しい問題意識が出されている。資本主義の破壊性の指摘である。そして「過剰富裕状態に達した先進資本主義諸国においても、惰性と政治的安定のために経済成長が追求され続ける」(304 ページ) とますます過剰富裕化が進むという認識である。惰性と政治的安定、つまり大衆の満足を維持できなければ権力の維持ができないという構造のもとにさらに経済成長が進み、過剰富裕化が進むという構図である。それは馬場氏の大衆資本主義段階という規定になる。この段階では経済成長と過剰富裕が手を取り合って進むのであるから。馬場氏はグローバル資本主義段階の規定の後に、人類滅亡について、「滅亡劇に登場人物は多々いる。既に資本主義が悪の元凶である。だが当面、最大の悪の枢軸は、アメリカ発のグローバリズムである。地球人類の存続を真面目に考えるなら、先進諸国は経済成長を止め、生活水準を今の 3 分の 1 程度に下げねばならない。(中略) 到達目標をここまで下げた上で、途上諸国に向かって、人類存続のために人口増加を抑制し、開発もこの水準までに抑えてくれと要請するしかない。それができれば人類滅亡の時間は大幅に伸びるから、その時間を利して環境改善のための社会システムと環境維持技術を開発することが出来るかも知れない。人類存続が可能になる筋書きはこれくらいのものであろう」(325～326 ページ) と人類存続のシナリオを提示している。最大の悪の枢軸がアメリカ発のグローバリズムであるとした点も新しい。それに加えて「アメリカの好戦性自体も人類滅亡の動力である」(326 ページ) とし、「人がもし同類の生物の存続を望むなら、根本的には金儲けと安楽の資本主義から離脱する必要がある。が、今はその前に、アメリカ的価値観からの離脱、つまり世界的脱米が必要なのである」(326 ページ) と世界的な脱米を要求するに至った。そうしないと地球環境は持たないということである。「グローバル化と人類」では、過剰富裕化についての新しい議論はないが、それに関連した「精神的豊かさの哲学」を提唱しているのが目につく。「日本は物的には過剰富裕状態である。経済水準をいささかは下げながら、社会の精神的豊かさを回復する必要がある。それが経済先進国として、人類存続へ寄与する途である。そのための基本哲学」(342 ページ) を挙げている。氏の文明批評である。この脈絡での議論は氏の中期以来のものである。「新段階論の提唱」では、「それ(アメリカ引用者)が推進する過剰富裕化は、一部の人の麻薬的快樂の内に、根本的な人類破壊を齎す」(392 ページ) という指摘もある。このように本書で過剰富裕論の一定の深化がなされたとみてよい。

2011 年馬場氏畢生の大著『宇野理論とアメリカ資本主義』(お茶の水書房) が刊行され、

その第IV編は「過剰富裕化論の徹底」で「経済成長論再考」、「資本主義の自滅—過剰富裕化のツケ」からなる。「経済成長論再考」で経済成長の用語史から始めて、成長の限界を考察している。「資本主義の過剰成長が資本主義諸国に大衆的過剰富裕状態を齎し、それが地球環境に壊滅的破壊を齎したばかりか、社会と人類の内的劣化を引き起こすことで破壊抑制の意思と手段を失わせ、併せて種としての人類自体の存続を危機に追い込んでいる。種としての人類が消滅すれば、人類存続を前提とする資本主義社会も当然に消滅する。これは資本主義の自己消滅過程に他ならない」(458~459 ページ)と資本主義の過剰成長という新たな用語を用いて過剰富裕化論を展開している。そしてローマクラブの『成長の限界』にも関説したうえで、『『経済成長』の目標が雇用と一定の生活水準を確保するだけであれば、それを基準として成長の限界を定め得る。ところが生活水準は特定できない。根本的には欲望と充足の悪循環的相互拡大があるからだが、成長イデオロギーの機構的根拠が資本の無限の自己増殖にあり、さらにその政治的発言である『経済成長』が、政府の便宜主義によって増幅されるからである。その結果、現代資本主義下の先進諸国では、軒並み過剰富裕状態が現出した」(461 ページ)と成長イデオロギーの機構的根拠としての資本の抽出がなされている。この成長イデオロギーが過剰富裕化を齎すのである。さらに馬場氏は、過剰富裕化の根因として「生産力の伝承蓄積と、消費欲望増進がきわめて高いこと」(461 ページ)を挙げているが、新たな主張である。ホモサピエンスとしての人類の本性が、過剰富裕化なのであるとすると、そこからの脱却は絶望的である。そして経済成長を「国際是」(466 ページ)としてから半世紀がたっており、「安楽と富裕追求のために、『経済成長』を追求し続けた、気づかざる結果である。目前の奢侈的消費を維持するために、子孫の存続基盤を奪った。もはや引き返す途はない。罪なるかな経済成長、である」(466 ページ)と印象的な言葉で経済成長批判を行っている。これに「禍なるかな経済学者諸君」という表題の項が続く。ここで馬場氏は、『新資本主義論』に対する経済学者の冷淡な反応を想起し、それについて「経済学者たちが、濃縮された経済成長イデオロギーという悪魔の呪いに取り憑かれてしまったとでも考えるしかない。実際彼らは、経済成長を至高善としたあらゆる経済問題の解消をそれにサヤ寄せする思考様式を刷り込まれており、純理論的にも拡大再生産の世界でこそ均衡があり得ると事実上思い込んでいる。その世界で、経済成長は滅びの途だと叫んだ者を、彼らは、愚かな小悪魔だと冷笑したに違いない。この刷り込みに対して自己批判することなく、社会的善事のつもりで経済成長を宣伝したりその策を考えたりする経済学者たちに向かって言うべきは、宇野公式通り、理論とイデオロギーを区別せよ、理論の役割はそこに隠された真実を発見することにある、ということであろう」(466 ページ)と痛烈な批判をしている。ここに過剰富裕化論が容易には受け入れられなかったことに対する馬場氏の心情を見ることができる。そして「経済成長の持続は人類史的に有害な道徳的悪であるばかりか、日本にとっては、不可能を望む妄想である」(468

ページ) とまで言うのである。

「資本主義の自滅—過剰富裕化のツケ」は開腹手術後の初めての学会発表を活字化したもので、実質的にこのテーマの最終報告である。「これは究極の資本主義批判である」(473 ページ) という言葉から始め、馬場氏は「本稿における資本主義批判は、逆説的であり、かつ根源的である。通常批判を免れる、資本主義の順調な経済発展や技術革新やグローバル化が、その裏面で過剰富裕の世界化をもたらし、それが近代文明の崩壊を伴う人類の絶滅を惹起することを通じて資本主義自体の消滅に導くとする。資本主義の良いとされる状態が、資本主義の悪ノリを起こして、資本主義自体を消滅させる」(474 ページ) と資本主義と過剰富裕化との関係を確認し、そのうえで過剰富裕の意味をおさらいしているが、本章の新味は次のところにある。すなわち資本主義が、21 世紀中に消滅する経路を明らかにした点とその論拠を示した点である。「1 きわめてありそうな、必然の経路 金儲け=資本蓄積に則った、世界規模での経済拡大の持続→過剰富裕化の昂進→自然環境・社会・種としての人間の、徹底的破壊→担い手の消滅による資本主義の消滅」(477 ページ、太字は原文) という経路と「2 これより望ましいが、実現不可能な経路 人類による危機の自覚→資本主義の抑制→生活水準の引下げと戦争放棄→社会・産業・経済機構の大変革→収縮経済の定着と連帯的社会制度の世界化→世界社会主義化→資本主義からの根本的離脱→人類存続の可能性」(477 ページ、太字は原文) という経路である。氏は「実現可能性と言えど2 は問題にならない。人類は、子孫存続のために当面の生活水準を大幅に切り下げようと合意するほど理性的ではなく、仮にその合意が出来たとしてももはや遅いかも知れない」(477 ページ) と2 の経路を切り捨てている。となると1 の経路しかないが、その論拠を3 つ挙げているからそれを見よう。「1 思想的出発点」が挙げられ、「ユートピア社会主義は当時の経済学に極度に批判的だった」(478 ページ) とオウエンにまで遡って、思想の出発点としなければならないとする。その際「マルクス、エンゲルスとも、資本主義下の生産性上昇の動的特質を踏まえてなお資本主義社会を乗り越える、社会主義社会の全体像を具体的に描くことは出来なかった。根底に生産力上昇を無条件に善とする近代主義が潜んでいた」(479 ページ) から思想的出発点はオウエンを初めとする「空想的社会主義」にしなければならない。「我々は、オウエンの『無知の過剰を伴う富の過剰』になお拘りつつ、『資本論』の洞察を読み込まねばならない」(479 ページ) というものである。「2 原理的根拠」は、資本主義の本性自体にある。「資本主義は、人間に内在する諸性向のうち、特に物的欲望の充足を動力として経済諸機構を形成し、欲望の疎外態である経済諸機構の運動を通じて本来の物的欲望をさらに増幅し、この経済機構を基軸として社会の全構造と社会意識を生み出す制度であり、近代資本主義はそれを極限化しあらゆる人間社会とあらゆる自然を資本蓄積の手段として利用するに至った社会である。(中略) 人間が物的欲望を自己拡大する経済機構を阻害しそれに支配された結果である。人類が人類として存続しようとする

る限り、欲望の疎外態である経済機構を抑圧し、社会の中に埋め込まねばならない。もし埋め込み得れば、(中略)望ましい経路が可能になる。しかしそれはまず実現不可能である」(480 ページ) というものである。「2 原理的根拠」の「経済機構を抑圧し、社会の中に埋め込」むことを歴史的に見ると、両体制(資本主義、国権的社会主義)ともそれは出来ずただ経済成長のみを追求したに過ぎない。その結果が過剰富裕化であるというのが「歴史的根拠」である。なお「付論」として「環境破壊の現在」と「人間そのものの劣化」が述べられている。「環境破壊の現在」では人類史での環境破壊の概略を述べたうえで、現在人口に膾炙している「維持可能な成長」論などの「資本主義批判や社会改革案やらは、響きの良い御詠歌かオラシヨの類であって、社会科学ではない」(483 ページ) と痛烈である。「人間そのものの劣化」では、資本主義の発展によって「自動車化、家庭電化が生活のための肉体労働を減らし、大人の肥満を生み出すとともに歩けない子供を生み出した。これは明らかに種としての人類の劣化である。が、この害の方はあまり意識されず、殆ど騒がれなかった。この劣化は肉体的劣化から知的劣化に及ぶ」(485~486 ページ) と現代文明批評にまで及んでいる。本書の最後の文章は、「資本主義が、万能薬としての経済成長を通じて世界規模の過剰富裕化を惹起し、その結果、人類の滅亡を通じて自滅するのが殆ど必然だと言える」(486 ページ) というものであり、馬場氏の過剰富裕化論の結論でもある。

IV 意義

過剰富裕化論の学説史的意義を考察する。過剰富裕化論の先行学説は、馬場氏の言うように殆どない。オウエンが唯一の例外と馬場氏は前述したように述べられているが、それもオウエンの時代の経済学批判の一環として出された文言「無知の過剰を伴う富の過剰」だけであって、馬場氏のような体系的な展開では全くない。オウエンを例外として「富の過剰」を説いた経済学はないと馬場氏の説を肯定できる。ペティ以来の経済学は、富の性質、如何にしたら富を増やせるかといったことを考究したのであって、それが過剰になり、地球環境が人類の生存に適さなくなるほど経済成長するという事態を想定していない。つまり私のいわゆる富・豊かさ論に留まっているのである。この富・豊かさ論は、経済学の生誕以降理論に漠然とであれ組み込まれていたが、19 世紀末のヴェブレン以降経済学の中に系論として組み込まれるようになった。ペティでは、富について財である場合と金銀財宝である場合とそ間で揺れている。スミスになると富について必需品、便益品であると明確化し、その生産方法の確定に向かっている。マルクスになると富は商品であると単一化し、その批判的経済学の展開に終始し、古典派経済学と同じく富・豊かさについての批判的視角はない。19 世紀末のヴェブレンになると有閑階級、見せびらかしの消費といった術語で、20 世紀に展開される衒示的消費を分析しており、馬場氏の富裕化論の前史にあたると見られる。ヴェブレンの特異な経済学は、ガルブレイスに引き継がれて富・豊かさ論

となっていく。しかしそれは馬場過剰富裕化論と似て非なるものである。同じアメリカの現実を分析しているが、ガルブレイスに過剰富裕化という問題意識はない。

次に経済成長至上主義批判についてみる。ペティ以来の経済学の歴史で、経済成長（勿論この言葉は、馬場氏の言う通り 20 世紀のものであって、それ以前にはない）は善であって、悪ではない。特に 20 世紀に入ると何れの国も経済成長を目標にしている。馬場氏の言では国際是である。このような経済学の歴史の中で、経済成長批判をしている経済学は極めて少ない。その例外の 1 人が、J.S ミルである。彼は定常状態論を 19 世紀の半ばに主張している。経済成長を支える出世主義に魅力がないし、またそれは自然を破壊するから進んで定常状態に入るべきであるというものである。要するにゼロ成長論である。現代における定常状態論者に、ボールディング（ボールディング他『ゼロ成長の社会』日本生産性本部、1974 年所収「定常状態の影」）、オルソン（同上書所収「序・ゼロ成長社会の考察」）、ミシャン（同上書所収、「病気・悪・不快—成長の代償」、イリイチ（『コンヴィヴィアリティのための道具』日本エディタースクール出版部、1989 年）、シューマッハー（『スモールイズビューティフル』講談社学術文庫、1986 年）デイリー（『持続可能な発展の経済学』みすず書房、2005 年）がいる。マルクスの資本主義批判はラディカルであるが、経済成長至上主義批判はない。このように見てくると、学説史上馬場氏の過剰富裕化論の一部をなす経済成長至上主義批判は、独自の価値を持っていると言える。つまり経済成長至上主義経済学からの脱却を提唱しているからである。なおマイナス成長論を唱えている論者に、室田武氏（『マイナス成長の経済学』農文協、1987 年）、岩田勝雄氏（『反成長政策への転換 現代国際経済分析』新評論、1998 年）がいるが、馬場氏への影響はない（これについての分析は、戸塚茂雄『過剰富裕化と過剰労働時間 第 2 版』開成出版、2009 年）。

世界観・社会観の転換も過剰富裕化論の構成要素である。これは近代的な世界観・社会観の転換を図らなければ、人類は絶滅するというものである。これは経済学説だけの問題ではなくなり、それをはるかに超えた領域に越境している。近代の歴史で、先人が血と汗と涙で勝ち取ってきた「自由解放、進歩発展、主体理性、人道人権といった、もはや疑い得ない絶対的価値として受容されてきた思想」（『マルクス経済学の生き方』346 ページ）、いわゆる近代的な世界観・社会観を転換しなければ、圧倒的な生産力の爆発、人口爆発、その結果である資源枯渇、環境破壊によって人類が滅亡してしまうというものである。要するに要素還元主義から全体論的思考への転換でもある。これはかなり深い思想である。この議論は環境倫理学とつながると言ってよい。馬場氏の研究には環境倫理学の影響は全くないが。

残された問題として馬場過剰富裕化論には、簡単な例証はあるが、過剰富裕化の実証分析がないことである。これについては筆者の拙い分析があるくらいであるから、今後の課

題である（戸塚前掲書第 8 章「過剰富裕化と過剰労働時間」、同『社会統計学研究序説』青森大学付属産業研究所、2004 年、第 12 章「過剰富裕化論と統計指標」）。

馬場過剰富裕化論と極めて類似した理論を展開しているものに環境倫理学がある。両者の学問的交流は瞥見の限りない。したがって馬場氏は、全くその影響を受けていないが、その論旨は驚くほど同じである。経済学は「人間と時間と空間の織り成す領域で、この 3 者間に間という文字が共通してあるから、人間はまさに間柄的存在である。従って倫理学とつながる」（戸塚前掲『過剰富裕化と過剰労働時間』87 ページ）から倫理学との協働は不自然ではない。とりわけ環境倫理学は、消費制限論と反成長論を提唱しており、過剰富裕化という概念を用いてはいないが、その主張に過剰富裕化論からも共鳴するところが多い。従って馬場氏は全く環境倫理学とは関係を持たなかったが、今後この学問との協働も課題として残されていると思う。

結びに代えて

馬場宏二氏は、多くの謎を残してこの世を去られた。多方面にわたる独創的な学説、独自の発想、独自の用語、あるいは造語で通説破壊的な活動を晩年までしてきたと言ってよい。過剰富裕化論もその例に洩れないことは本稿でも知りうるであろう。窮乏化に対して、富裕化、そして過剰富裕化、過剰富裕社会、経済が目的になった社会、挙げればきりがなし、独創的な言葉、発想の数々。ただこの過剰富裕化論研究は、晩年の連作で終わったとみてよい。それは私との会話の中でも言及されていたし、最晩年は経済学史逍遥であって、ヘンリー・マーチン『東インド貿易の諸考察』の全訳がさしあたっての仕事であったと思う。その間にチェルヌイシェフスキー、ゾンバルトを読んだりしてもいた。マーチン翻訳は残念ながらその 1 回目しかできなかったが。まだお聞きしたいことが多くあるが、まさに馬場宏二氏の謎が残っているのである。

ほぼ同じ時期に着想された会社主義論と並んで過剰富裕化論は、馬場氏の学問人生の中盤から継続して、しかも精力的に行われた研究であった。一時持て囃された会社主義論に比べ冷遇された過剰富裕化論、この残された巨大な研究をどう発展させていくのかが、残された者の使命である。

（本稿は、2012 年 6 月 16 日の馬場宏二追悼研究集会[於・東京大学社会科学研究所]における報告原稿である。）